七夕前集

七夕や入相の鐘をたより便　素堂

いうなるものも静かなれ　ちひろ

蓮の實の吹ちらかす目の玉　ちひろ

焼米のほのつくづくし　床木

明夜よりあるものを吹ん心の哀　子文

笑へる人の寝姿　芳人

東京帝国大学図書

楽内ハ移りのかるゝお住居　末木
程女　清彦のもてなしする　子文
記念ハ謡会前の唄はす　芳人
移りゝ紅もたしなのつく　木
家の妻女舞ふの五六人　文
俱ハ祝つも　よ日の酔ひ　人
切姫ハ渡の　ゝ巻ほの色　木
城の六ッゝ　言あた　文

上下も面ハ　ゝ高衣
あゝ男ふ　おゝ稲荷
妻自ハ　ハもかう色
ゝ位の世ハ　時ゝて

人
木
文
人

ゑてもくさ叔とハ天の川　素柴
一夜の跡を告る古川渇　ちいろ
さし肴の謡り乃林と業平り　隋青ろ
志とし枝る胸けの露　木　周行
けんまく下巧の腰手の袖帰　ろ、
狙かり子けしらする　青　青木

おしくハ男もまじる紛ゑ達
たとも借銭もなし
床言ずけ古郷も集ぬハさきよ出
福のひもあるり雲の裸身
雑児の浮世すかする笑ひ負
他人の中も皆親子也
胡月夜年を売る市まで
ものふてめる情の叢原

木　ろ　素　木　ろ　素　木
木　巧　・　本　・　巧　・　本

猫もまた書しまの名を呼
しーつを引けて花を嫌ふ
詩るかも京の王の不業門
隣りくの門ゆきて春日

春木
遠方木
木

ふる月初日江戸より毎
別れるみとを隣て
夜泣せて七夕つめの抱ふ　素堂
原庵の床をさすれ炬風　ちひろ
夜う隣も持ちぬ静さ　例香
まるまる菊を白花をやこ　木木
月の雲はまますなの芒　ろ
書も移も芒を遠ふ　香

投所中同学の白をつゝむ迄
風ふくとても風吹き長
牡丹の前自のなきの玄旨
公宴も義を尽くす事
長唱に詩を待ふし世間
秋の月いつ翌日の月
月のみ損ずる情なる鬼
時の鶯を聞きしと無

本
乃
香
本
乃
香
本
乃
香

毋二人ともその幽玄
の庭の跡を尋ねて後
過ぎし昔の切者の事時
焼めしと思ふ香の事

香
本
乃
香

七夕

雲鶴と一はゝ書る

豆出も雲鶴や はやさん男七夕　素梁

昔の夜を百ぢ小つの星　ちいろ

葉の上ちし今物を飛　〃

孫あの沒る訓る高ら　万伸

拾ふ孫の孫の人の妹　馬梁

鶏の雀の中のよう雑　木木

静さよ松ふ此の打しけ　青以

ふりなる祖ハ出る碎し　梁伸

淡ぶ人夢ふ月の祖も沒ぬ也　以木

古ふる似ふる名ふもあし　伸梁

悦しを待ハ無言の内ふ花　木

繋刻ゆりて連ふ物を　

月夜を帷ふ月ふ自今　

ふ孫ふ孫ふ灯火　

竹針に一里ならしの催かな　以

呼ぶ猫そてあるる声けり　梁

しさ眉ハ祖父仁佐ぬ宗の客　錦

偏笠子はむし春の暮く　以

今一團靜さまさん星むつ立　素繁

うき岩枕ての川ほちいろ

のてる蝦の志くら寐る夜の明、

起し　土手遠ふ下諸の侘　吾三

風ふけも蝦も空ある寸まふ　禾本

見く謡まこのりふ不む声かな　鶴外

柿さかりなる頃

二日三日より雨降る寸白

三木

雨降りつゞきて出でざるおり

外

雨なる中を踏みあるくさ

三

よりなる嵐の姿哉

木

雨降りつゞきし今の世の

外

妹が目に夜の新月

三

家の業内より捨る桃竹

木

うたゝ寝も庶幾

外

雨降りの時も

三

家よりいつの一度の響あり

木

井や柿より志のふ苦雨

外

仏の世ハ定まもきり星の流　素梁

言傳もうるおてめの川風　ちいち

炉ハ雪ゝ葉山も白の雪ゝん　田海　ろ

蕭〳〵へぬけるゝ北を　木

晨明の祝き禰もゝりあり　正阿

夜明を夏のうるゝ陶を　同行

清　仏

霜をけを犬も狐もゝ鳴

人もあるゝのある時ゝ也

月代をしをもゝ仏の落花

夢ゝ孫ゝもも素ゝ多張ゝ

古里をもゝゝいえぬ三年

横ゝもゝ尚もはゝりなる

月星〳〵袖ゝを高ゝ夜寒ゝ

蕭ゝゝ鳴ゝ松ゝ仏尼

木　ろ　清　木　ろ　清　木　ろ

仏　仏　仏　仏　仏　仏　仏　仏

もろもろとかのうふを篇に
掛(上ケ)ぬる七種の彩
雲ならん琴の糸の美
功をなやまよ甲子の上

~~寿万年寿~~

七夕の字

家〳〵ハ七夕つめの草結ん　素堂
祈るこの糸の郭公鳴く　ちひろ
殊更戸よ高の下地ならん
妹の形をつまむさ　苔蘚
雲なら姫とゑとハ世界　木本
すまのうちをうする物新　園行

一ふきの風の音や門つまま　正阿

傘程ふる小雨哉　木

ふるも宮ふる菜を折意　萩

服ハ元ふけども記ぬ行隅　阿

似を負ハ女ずゝ来ぬ赤額　行

椿伸の高ゝ地ゝる振家　萩

菊のふのいつしのこゝ月の頃　木

ふけもあゝふ花夜寒大　行

まり意の粉も忘れる独杓　阿

我と我ゝを行ゝ対　木

富ふ素ゝ富み遠ふ便臣　萩

出ふせの仕し伝の午の日　阿

七夕の井

七夕の井よりくまんとて

素堂

夜はあけぬ

ちいろ

やうやうし人も閑寂

なる

本木

新町や雪の

敬齋

箕手に植のちるぶ

ちこしよ流行の川と生

本

喰ふあつまの体

夜もふかく

本

いそぬ恨を

井

やうと生

本

苦もなく

井

弱成も

雑のまきしよ

八ばしらや夢ふの物枯の色
年頃理はもらかしは竟
紅葉うすくの花をうつ合
三人よりて勇ましかるる

木
斜

相良
相良

十五夜

相良殿といつるを
相良をよめり学もこる後
赤染
七夕の節
千しろ
おハ解しら
百山
懸巣もふす南の風の妹
本本
陸ちち笠ふ出代の自
兎田
妻の行福をナ
山
陳もも立ふ
水日の西

つくしの小舟の柿を広げて
おもはのなかを廻る商人
高くも差す早苗を見
何の区別もいくぬ初恋
年のかい君とすう眼
夜ふ　濤を小風の唄
ほしくもあり借家よりの
ふるさとも　神の踏立

石田木山田木石

いさぎよく見えた仏壇の
看んてかさねる茶の盃
春の日の　平家風
陸も壹音よ　行度世

石田木石

鶯の呼ぶ梅を
をりも枯れぬ梅の名を惜
しみつゝ何もなき妹
雪のあのうりゝ
はつ花の袖の左右
女郎花いつゝ袖ふる風の
奥ゆかしき道の草ぬ紅

素堂
ちひろ
、
周行
嫌舟
行

家に来る人も枯れそめし梅捨ひ
孫兵衛の戸の
梅の少の
梅の高きちいつゝぬ
雪つゝ絵ふて花
ちゝと階
何者の影
小無月も
夏名八十日前
舟
舟
舟
舟
舟
舟

夫れ世間も似たん年一ツ　行

俗てさいとうる六道の旅　行

傳ふ所も傳ふ世ん乾ふな　兼

要の自形なる　尼イのうけ　行

巻九
十二目

詠歌

七夕の石札写しなふし　黄良

煙を憑心の里ハあふも　李碩

賤の女の粉つく喰ふて　田年

地ふくうめも八月のうさ　荷為

晨明を意ふ人を強　春町

余事めつらしき賞ふ　兎月

すがや長柄小屋の事　車三

樹の立荷をふるる角た　十五嶺

思ふ家の屋を出ずん更衣　渓

嶮けふ過る今川の抜物　年

伝の世は苦もおい孫の高　尚

なしも消る勝の仏光　所

文をくもらす行む冠夜　月

翌は山のうの雪もけ光　三

先生も鈴の山家の松ふり　東嶺

屋まを自を隠を鈴　渓

聖堂の鳴をいへ目は庵　年

面さん夜の明ぬうち　尚

十一月

芭蕉庵の留主

七夕の竿具よ建て庵の家　涼水

ぬき菜の土産も意幣の宿　曾良

情緒の足を伺く枯れ　松乙

記事よりは　朝〳〵の月　田年

稲妻も嘆きなし　静かなり　木

ちらちらと袖文の雑談　乙

笑ふ人ほたるを見ては小盃　年

半蛙　木偏もなかり遠元　木

根岸しを腰のぬけまる事計り　乙

意の歌をそ元意ふ　年

巨燈をあり立て五条橋　木

言さよ　低徊の夏　乙

半園を意に後月の花　年

ひ〳〵の夜〳〵の時　木

去年ぞ人まつ山の郭公
比叡を松もとり三井を松もと
花やちる岡の離宮の時鳥
ちるを歌まのうらめ問なし

本